提 言

もっともっと子ども目線にならねば!"おとな"が変わらねば!

/ □ 蒸(岡山大学名誉・特命教授/新見公立大学特任教授)

最近,気になった標語を二つ。『よい子は静かに遊びましょう』,そして『僕,スマホになりたい』。子育て支援が声高に叫ばれ,待機児童の解消や病児保育の充実,発達障がいの子どもたちへの支援・教育が各自治体の大きなテーマになっています。いろいろな情報がマスコミを通じて流され,さまざまな取り組みがなされています。でも,"おとな"である私たちは本当に子どもたちや若い保護者の心に十分に寄り添った対応を考えているのでしょうか。

『よい子は静かに遊びましょう』, これは静寂が求められる図書館に掲げられた標語ではありません。本来, 子どもたちが元気に遊ぶ場所である児童公園に掲げられた看板に記載された標語です。公園で元気に遊ぶ子どもたちの笑い声



に"うるさい"と反応してしまう"おとな"たちがいることが残念でたまりません。クレーマーといってもいいかもしれません。もっと残念なことは、このようなクレームに対して事なかれ主義に陥ってしまう、もっと質の悪い"おとな"たちが存在することです。子どもたちのことを子どもたちの目線で考えることができていたら対応は全く違ってくるはずです。"よい子"という言葉が"おとなたちに都合のよい子"と聞こえてきます。そうではなく、子どもたちはもっと、もっと子どもらしく自然に育っていいはずです。

子育て支援策をいくら作っても、いくらお金をかけても "おとな" たちの心が付いてこなければ、子どもたち、そして子育て中の若い保護者の方々の気持ちは晴れることはありません。"おとな" 中心の考え方がはびこる社会を変えていかなければなりません。

『僕,スマホになりたい』,心を打つ一言が付いてきます・・。『スマホになったら,お母さんがいつも見ていてくれる』。スマホ中毒かと思われるくらい,スマホ操作に夢中になり,子どものことはおろか周囲のことも見えていない保護者を目にすることは多々あります。電車の中はいざ知らず,子どもたちの健診の場で,さらには診療所の待合室でも・・。これはよくありません。子どもたちが自分に目を向けてほしいとき,保護者は当然,目を子どもたちに向けるべきであり,心ある周囲の人たちは保護者にアドバイスをする勇気を持って欲しいと思います。このようなことを書くと,識者と称される方たちの一部から"最近の若い親は!","核家族化が・・","TVに子育てをさせて,云々"と,したり顔をしての叱責が矢継ぎ早に出てきてしまいます。でも,ちょっと考えてみてください。1歳を過ぎた頃から3歳頃は,毎日が運動会状態の子育てになります。お母さんはトイレにも行けない状態にすらなります。TVを見せざるを得ない時間もあると思います。一昔前のようにすぐそばにおじいちゃん,おばあちゃんがいる時代ではありません。

識者と称される方たちも、このことをしっかりと踏まえての社会全体への啓発と子育て支援へのアドバイスが 必要と思いを馳せる、今日この頃です。